

歴史哲学とデジタルリソース

平井雄一郎(澁沢研究会)

2016年12月3日

澁沢史料館

1. 「記録」の「デジタル」化とは？
2. サイバーエージェントの『ヒストリエ』
3. 「ヒストリエ」と「ゲシヒテ」、あるいは言語論的転回

平井雄一郎・高田知和編

記憶と記録のなかの
渋沢栄一



Baron Shibusawa's Triple Faces

法政大学出版局

平井雄一郎・高田知和編
『記憶と記録のなかの渋沢栄一』
(法政大学出版局、2014年)

記憶と記録

記憶とは・・・身体に内在化されている過去についての「情報」

記録とは・・・身体の外において文字などなんらかのメディアによって成形化されている過去について「情報」

(平井雄一郎「序—「渋谷栄一」という「意味」への招待」、平井・高田編前掲書より)

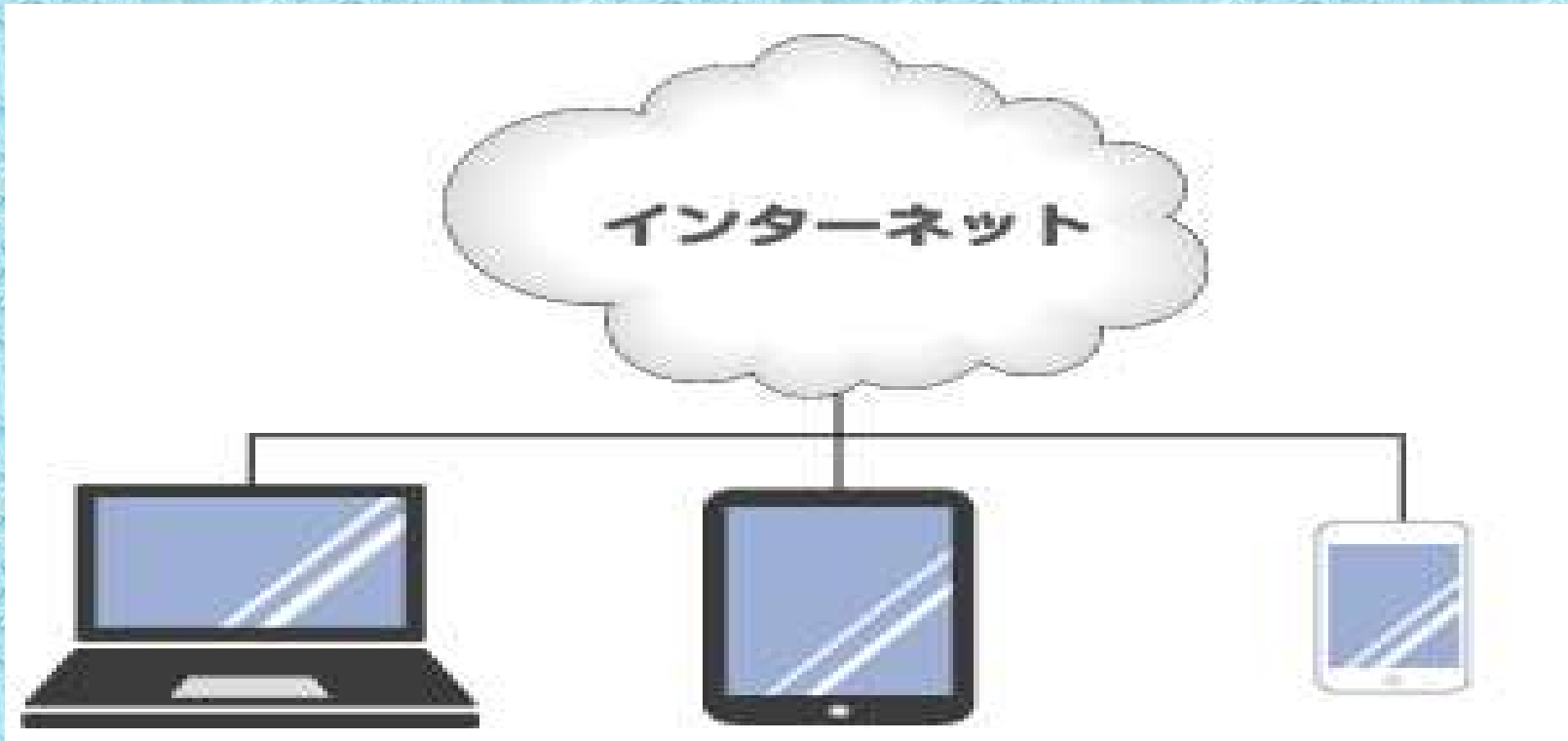
**「記録」> 資料、史料、materials、documents、
sources、archives・・・**

**「記録」としての『渋沢栄一伝記資料』
(Shibusawa Eiichi Biographical Materials)
→そのデジタル化(電子化)とは・・・**

・「メディア」としての物質性(あるいは物理的空間)の消滅

**＝「メディア」へのアクセス、「メディア」内のアクセスにおける経済的・身体的コストの劇的削減
→真の合理化、アーカイブズ近代化最終段階**

デジタル版『渋沢栄一伝記資料』の本質としてのクラウド性



→アーカイブズとの出会いの偶発性・不確定性・予測不能性



**株式会社サイバーエージェント(東証コード4751)の
社史『ヒストリエ』
(2014年7月から刊行継続中～)**

(日本経済新聞電子版、2015/2/18)

サイバーエージェント

代表取締役社長 藤田晋:

「社史編纂と言っても、事実を淡々と並べた「年表」を作っているわけではありません。やるからには誰もが読みたくなるものにしなければいけない……」

「企業文化を後につなぐ世代に残していくためにも、社史は必要です。(中略)良い企業文化が、私が社長をやめたらなくなってしまうようでは困る。この先、誰が社長や役員になっても、きちんと伝えて、引き継げるよう、文字にして紙で残すことが重要なのです。」

〈藤田流・社史の哲学〉

- ・「事実の羅列＝年代記／クロニクル」の否定
- ・企業の同一性・連続性を保証するもの＝企業文化（記憶）の共有



- ・「歴史」の操作性・権力性・暴力性、あやうい魔力・・・ということについての自覚

※歴史漫画『ヒストリエ』をめぐって

岡本 充弘
鹿島 徹
長谷川貴彦 編
渡辺賢一郎

歴史を射つ

言語論的転回
文化史
パブリックヒストリー
ナショナルヒストリー

御茶の水書房

岡本充弘・鹿島徹・長谷川
貴彦・渡辺賢一郎編

『歴史を射つ 言語論的転
回・文化史・パブリックヒスト
リー・ナショナルヒストリー』
(御茶の水書房、2015年)

〈ヒストリエ〉と〈ゲシヒテ〉

→ (ソフトな) 言語論的転回論とは？

ゲシヒテGeschichte (歴史そのもの)

～(ゆがみ)～

～(ゆがみ)～

言語

(言語はけっして透明な「メディア」ではない。ゆえに言語は「過去・歴史そのもの」という外部を公正中立に表象・再構成することはできない)

～(ゆがみ)～

～(ゆがみ)～

ヒストリエHistorie (歴史叙述)

・歴史はさまざまに描かれうるが、常に資料というレファレンスによって制約も受ける(≠小説、文学)

・デジタルリソースという「資料」の洪水→歴史家としての主体性を見失わないために、資料の取り扱い能力の鍛錬・向上がさらに求められる

・さまざまな歴史の中での「失敗史」の重要性

(澁沢敬三「七十七銀行七十七周年祝辞」『犬歩当棒録』)

「私は終戦後考えておりましたことは日本に実は色んな歴史があった。(略)これを大観いたしましては大体が自慢史であったということでもあります。(略)けっきょく、失敗を隠すということは心の中に常に劣等感が大きく潜んでおることでもあります。そして外観を出来るだけ湖塗しようあるいは逆に強がって、あるいはもっと立派に見せかけて誤魔化そうという心理が強く働くのであります。そういう意味から申しまして、私は日本に失敗史が必要だということを痛感しております。」